



AET2 and OSM1

Asian and Middle Eastern Studies Tripos, Part II
and Examination in Asian and Middle Eastern Studies for the Degree of
Master of Philosophy

Friday 10 June 2022 14:00 – 17:00

Paper J12

Modern Japanese Texts 3

*Candidates should translate **both** questions from section A and answer **one** question set from section B. Both sections carry **equal** marks.*

SPECIAL REQUIREMENTS TO BE SUPPLIED FOR THIS EXAMINATION

Student declaration form

SUBMISSION REQUIREMENTS

*Answers may be written by hand in **black ink** or typed.*

If written by hand, upload your answers as a scan or image file.

If typed, upload them in a document, such as a Word document or PDF.

Files should be saved as J12_[your number].

Upload a completed student declaration form as a separate file.

RESOURCES PERMITTED FOR THIS EXAMINATION

Students are permitted the use of jisho.org and weblio.jp in support of their translations; the use of any other resource or site is prohibited.

Section A:

Please translate **both** of the following **two unseen** passages from Japanese into English. **[25 marks each]**

(1)

刊行にあたって

「グローバル化」「アジア外交重視」といった国際関係に関わる言葉を、マスコミを通じて日々目にし耳にする。しかしながらこのような現象は現代に始まるものではなく、日本・日本人は常に周辺民族、社会、そして国家と関係を持ちながら、その歴史を歩んできた。日本・日本人の歴史を考える上で「外」との交流と相互影響は欠かせない視点であり、現代の複雑な国際関係を理解するためにも、前近代の対外関係・国際交流の歴史についての正確な理解が必要である。このことを反映して、近年、前近代の対外関係史においても、さまざまな分野で著しい研究の進展がみられ、多くの蓄積を持つようになってきた。

本シリーズは、こうした現状をふまえ、縄文・弥生時代から十九世紀末の日清戦争前後にいたる、日本の対外関係・国際交流にかかわるさまざまな事象を幅広く取り上げ、日本がどのような歴史的環境のもとで歩んできたかを明らかにすることを目的としている。全巻を通じて、アジアおよび世界の中の日本・日本人、日本の中のアジア・世界を描き出すシリーズとしたい。それはまた「日本・日本人」の将来の展望に欠かすことのできない視点でもあると考える。

シリーズの名称をパラフレーズすれば、過去における「日本」と「外」との関係を考察する、となるが、その「日本」という広がり内実は決して自明のものではなく、何が「内」で何が「外」

なのかは、時代や地域や問題設定のいかんによって、さまざまに姿を変える。たとえば、国際法上の「日本人」とは日本国籍をもつ者であって、民族的には日本人である者が外国籍をもち、民族的には日本人でない者が日本国籍をもつことは、ごく当然のことである。ところが、日本は一族一国家だという幻想は今でも根強く存在している。このような「内」と「外」の裂け目に光をあてることによって、「日本」や「日本人」が実は不定形で流動的なものにすぎないことを意識化し、そこから逆に「日本」や「日本人」とは何かという問題を、より深くとらえ返すことができるであろう。

また、対外関係史の視角は、「日本らしさ」とか「日本的」とかいう、論証不能な指標——思いこみ——で日本文化を語る本質主義（エッセンシャルイズム）的幻想からの解放をもたらしてくれる。さまざまに設定されうる「内」と「外」。その干渉の場で多様な文化が生み出され、それが列島上の各地に根づき、響きあって「日本文化」を形づくっていくものであろう。最初から「日本文化」という固まったなにかがあって、それが「外」の文化とどう接触したか、というのではなく、「外」との交流の場そのものが「日本文化」の母胎なのだ、という観点で語りたい。たとえば、禅を日本文化の粹として称揚する言説があり、日本人だけでなく、とくに日本通の欧米人の間で常識化している。しかし、日本の初期禅宗界に**瀰漫**（びまん）する中国憧憬を一瞥するだけで、その虚構性は明瞭である。一方で、日本禅宗の現実の姿が、中国のそれと大きく異なる要素や方向性をもつこともたしかである。このような禅に典型的にみられる事象を、「日本的なるもの」への回帰という万能の説明で済ませるのではなく、内／外にまたがる諸要素の複合として、歴史的にかつ具体性を見失わずにとらえることもまた本シリーズの課題の一つとして設定したいと思う。

Vocabulary:

シリーズ	series (of books being published)
称揚	praise; admiration; extolling
瀰漫	spread; pervasion; permeation

荒野泰典 et al, 『日本の対外関係 5 : 地球的世界の成立』 吉川弘文館, 2013, pp. iii-v.

文学の歴史性を読む

本のない日々というのは考えられなかった。

昔母親から聞いた話で妙に記憶に残っているものがある。

第二次世界大戦中、南の島に送られた日本の兵士の話である。本と名のつくものは最初からもって行かなかったのか、そんな物は途中で捨てざるをえなかったのか、なにしろ南の島にたどりついたとき読みものといえ、偶然手元に残った一枚の薬の効能書だけだったのである。

兵士はくる日もくる日もその薬の効能書を読んだ。あまりくりかえし読むうちにその効能書は文字が見えないほどぼろぼろになってしまったという。のちに作家となった人の思い出話なのか、物を書くこととは関係のない人生を送った人の思い出話なのか、その話をしたあと母は、そんなふうに活字に飢えるというのがあるのはよく解ると話を結んだ。だがそのとき私は思った。その兵士はつかのまでもいいから日本に生きたかったのではないだろうか、と。

空はどこまでも密林に覆われている。大きな鳥が鋭い声で鳴きながら頭の上をかすめる。暑

(2)

さと飢えと疲労とで兵士はうなだれて地べたにしゃがんでいる。やがて彼は胸ポケットからくたびれた紙切れを取り出す。その紙切れを開くやいなや、ジャングルが掻き消え、懐かしい日本が立ち現れるのである。兵士にくりかえしその紙切れを開かせるのは、今ここにないものを眼の前に呼び起こす言葉の力にほかならない。

その話を聞いた頃、私はアメリカで少女時代を送っていた。そうして、祖国を離れた孤島のように思えたそのアメリカで、可能ながぎり日本に生きるため、くる日もくる日も日本語の本ばかり読んでいたのである。以来、本のない日々というのは考えられなくなった。私にくりかえし日本語の本を開かせたのも、今ここにないものを眼の前に呼び起こす言葉の力である。そんな私にとって、日本語の世界と英語の世界とが昼と夜のように相容れぬ世界を象徴するようになったのも当然である。同時に日本語で書かれた小説と英語で書かれた小説も、地球の表と裏にぽっかりと浮かぶ孤島のように、互いの存在すら知らぬまったく無縁のものに思っていた。だが文学は孤島のものではない。いにしえの時代の神話やおとぎ話ですら遥かなる海を渡り、ましてや私の読んでいた日本の小説とは、黒い大きな船が自在に四海を渡る時代の波を受けて生まれたものである。そこには西洋の「近代小説」の血が脈々と流れている。英語から逃れるように読んでいた日本語の小説は英語の小説と無縁などどこか、それとの関係の中に考えられるべき性質のものであったのである。その事実によりやく納得したのは、母の話を聞いてから二十年近くもたち、日本語で小説を書き出してからのことであった。

Section B:

Choose **ONE** of the two **unseen** passages in Japanese and answer the comprehension questions that follow it in English. **[50 marks]**

(3)

近代歴史学と時代区分

(1) 近代に生まれた三区分法

一般に歴史を書くという営みにおいて、時代区分は書かれる歴史に意味を与えるうえで本質的な役割を持ちます。特に前節に述べたようにランケに象徴される個性記述的科学として確立された近代の歴史学は、その歴史主義的方法論自体が時代区分を要求します。

近代の歴史学において最も基本的な世界史の時代区分は古代、中世、近代の三区分法です。論理的に当然ですが、この三区分法はそれ自体が近代に生まれたものです。中世的な社会構造が解体して、新しい社会が形成されつつある時期に、その新しい時代に名前を与え、それを意味づける枠組みとして三区分法は生まれました。つまり近代的な歴史の捉え方自体、言い換えれば近代的な歴史意識が、この三区分法を成立させたわけです。その意味で、近代は、古代、中世、近代という三区分法で歴史を見る時代という自己言及的な性格を持つているともいえます。

もともと三区分法の発想のもとになった具体的な起源は必ずしもひとつではありません。例えば古代の学芸に関心を寄せたルネサンス期の人文学者は、古代／中間の時代／近代という三区分で世界史を見ていましたし、プロテスタントは原始教会の時代／カトリック教皇たちの時代／プロテスタントの時代という見方で世界史を捉えていました。これらの三区分は具体的な時期や年代において、厳密に重なりあうものではありませんが、近代の初期にあたつて、自分たちが直近の過去から断絶した新しい時代を生きているという歴史意識を反映している点で共通の性格を持っています。

留意すべきは、近代の初期にあたつては、自分たちの生きている「新しい時代」がどのような性格や特徴を持った時代なのかを自立的に表現する言葉がなかったということです。「新しい時代」はさしあたって、直近の過去の否定としてしか理解されません。そこで呼び起こされるのが、その直近の過去の向こう側にあったさらに古い過去です。直近の過去は、かつてその古い過去が減じることによって成立したものと捉えられます。そこから、その減じ去った古い過去の中に、直近の過去を乗り越えるために甦るべき要素があるという発想が出てきます。近代の黎明におか

れるルネサンスは、まさに古代の文芸の復興運動そのものでしたし、フランス革命の当事者たちは、自分たちをしばしばローマ時代の共和主義者になぞらえました。こうして、新しい時代、すなわち近代にとって乗り越えられるべき「暗黒の時代」としての中世と、その中世によって抑圧されていたが、いまや再発見されて新しいかたちで復活させられるべき古代という三分が生まれてくるわけです。

近代の初期（17世紀ごろ）に、さまざまなかたちで用いられていた三分法は、ランケ的な歴史主義と合流し、19世紀には古代、中世、近代という3つの構造的に異なる時代に区分して世界史の発展段階を捉える見方が定着しました。それは概略以下のようなものです。

(2) 世界史の発展段階としての時代区分

まず古代とは、ギリシア・ローマ文明から西ローマ帝国の滅亡（476年）までを指します。この古代において「世界」は地中海です。政治体制として、ギリシアはポリスに特徴づけられ、ローマは共和制から帝政への変容に特徴づけられます。経済的には古代は奴隷制を前提とする社会であると特徴づけられます。

つづく中世は一般に、西ローマ帝国の滅亡から東ローマ帝国の滅亡（1453年）までの期間を指します。シャルルマーニュ（カール大帝、742―814年）による西ヨーロッパ世界の完成を軸として中世世界の形成期とみなされる前期（476年―10世紀）、教皇権が絶頂を迎え、十字軍が行われる中期・盛期（11―13世紀）、封建制の矛盾が顕在化し、近代への移行につながる構造変動が起こり始める後期（14世紀―1453年）とさらに区分することが一般的です。

中世は一方で封建制の時代であり、他方でカトリック教会の時代でした。逆にいえば、一方で封建領主、他方で教皇権力に対抗する力が、その後の近代を作り出すという位置づけにもなりません。中世において権力基盤の弱かった国王が、一方で諸侯に対して権力の集中を図り、他方でローマ教皇から自立して絶対王政国家を構築していく過程は、まさに中世から近代への移行期に位置づけられますし、中世において封建領主や教会の権力から一定独立した位置を占めていた自治都市の存在も、のちの近代を準備するものであったと一般に位置づけられます。

そして近代です。先に中世の終わりとして東ローマ帝国が滅亡した1453年という年号を象徴的な区切りとして挙げました。そのまま裏返せば、近代はおおむね15世紀の後半から始まるということになります。これは近代の起源についてのひとつの考え方としてももちろん成り立つことであり、実際そのように記述する世界史の教科書はいくらでも見つけることができます。

(3) 近代はいつ始まったのか

ただ、近代がいつ始まったかという問いは、大きく2つの理由から少し複雑な問題をはらみまします。ひとつの理由は、すでに述べたように、近代という時代区分が、近代人が自分たちの生きている時代を過去から区別し、「新しい時代」として切り出してきた自己言及的な概念であることです。もうひとつの理由は、近代という時代が現代を生きる私たちの時代であり、その意味で現代と地続きに捉えられていることです。

(中略)